[書評] 村田純一（著）『色彩の哲学』

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2017-10-03 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: メールアドレス: 所属:
URL	http://hdl.handle.net/2297/9788

村田純一著
『色彩の哲学』(2002年，岩波書店)

本書は，分析哲学系の議論に最もよく通じた現象学者の一人によって書かれた，色彩に関する哲学である．この言い方は，たんにおざなりな紹介のつもりではない．もし本書の議論が成功していれば，恐らく分析哲学系にありがちな「科学」への迎合的な偏りを脱しつつも，現象学系によく見られる「文献」への教条的な忠誠とも一線を画した〈哲学〉が，色彩という具体的事象の分析に示されているはずだ，という大方の（？）期待を表明したものである．この期待はどれほど満たされたのだろうか？評者の見るところでは，かなりの程度満たされたと言っていいと思う．とはいえ，もちろん著者はこの隘路を慎重な足取りで進み，決してすぐに破綻するような粗雑な議論を展開しているわけではないのだが，何か表現しにくい不満が残るのはなぜなのだろうか．これはむしろ，哲学にいつも〈優雅さ〉より〈野蛮さ〉を求めてしまう評者の方に問題があるのかもしれない・・・

本書の目指すところは，色彩現象に関する「生態学的現象学」である．それが何かといえば，「現象学的観点を生態学的観点と結びつける試み」(本書，p. 263)だと説明されている．ところで，この現象学的観点とは，このテーマに即していえば，色彩についての常識的な理解を「科学の先入見」から救出し，色彩についてのわれわれの経験を「生活世界」の場においてあるがままに記述しようとする態度である．ここからして本書は，(第I部) 色彩が本質的に空間的な存在であること（それゆえ色彩が世界の中に存在していること)，および (第II部) 色彩が多くの科学の主題となるべき多様性・多次元性を備えた現象であること，を主張することになる．

さて，著者の言う「色彩の科学」の先入見とは何か．それは，客観的世界を物理的世界とした上で「客観的世界に色は存在しない」，「光線に色はない」，「色とは感覚である」と主張する，実は科学的というより哲学的／形而上学的前提のことである．これのどこが問題か，むしろわれわれの日常的な色彩経験をこれと整合的な仕方で説明することの方が哲学のまっとうな任務ではないか，と考えてしまうのは，物理主義／自然主義に毒された評者のような者の浅はかさというものかもしれない．というのも，少なくともおよそ15年ほど前からの著者の揺るぎなき立場からすると，「物は赤いから赤く見えるのだという常識に含まれた実在論的直観は，どのような反省によっても逆転されない実在の優位を示している」(「他者の実在——実在論擁護の試み」，藤田・丹治編『言語・科学・人間』1990，p. 208) からである．もちろん，かつての大森荘蔵が苦闘した知覚世界と物理世界の「重ね描き」の問題が，物理主義／自然主義の枠組みの中ですでに解決されたと言うことはできない．なお今日も，「物は赤いから赤く見えるのか，それとも赤く見えるから赤いの」か（同，p. 192）という問題は，うまく解けていないのだ．

例えば，客観的的世界に色がないとすると，色は色のない世界から突然に生み出されることになるが，それは「精神と物質の相互作用を認めるのと同程度か，あるいは

それ以上の不可思議な過程を認めること」なのであり，これが理解不能なのは，「そもそも色のない世界には色彩の位置はまったく存在しないはずだからである」(本書，p. 13)．また，色彩が感覚だとしても，感覚という経験が赤いわけではないとすれば，赤の感覚は赤という対象についての感覚以外ではないだろうが，その対象としての赤はどこに存在しているのだろうか．「網膜のなかだろうか．神経系のなかだろうか．あるいは，脳のなかだろうか」，しかし「明らかに赤色はそれが見える位置，つまりわたしの目の前に位置している赤鉛筆のある場所に位置しているというほかはない」(本書，p. 14)．

こうして著者は，現代科学の基本前提を無効化した地点で，色彩現象がもつ独特の空間性の諸相を解明していくのだが，それら，色彩の奥行きや，表面色と面色の違いや，照明の役割や，色彩の恒常性などについての著者の議論の詳細は，今後，色彩について論じようとする者にとっては決して無視することのできない貴重な情報の宝庫となっている．さて，色彩に関して門外漢の評者としては，それらの議論の詳細に立ち入ることはできないが，そこから得られた一つの違和感と一つの刺激だけは報告しておきたい．

違和感とは，率直にいって，科学的／哲学的偏見にむしばまれていない色彩現象の無垢の（？）記述を目指す議論が，なぜフッサールやメルロ＝ポンティのテーゼにそれほど密着して展開されねばならないのか，ということである．事実，著者は知覚に関するフッサールの射映概念から出発し(本書，p. 22)，それに適宜注釈を重ねながら，第I部の議論全体を締めくくるに当たって，これで「色彩は射映する」というフッサールのテーゼの解明は一応の到達点に達したと宣言している（本書，p. 123)．しかしそれでは，色彩現象に即した，フッサール以降の新たな記述というものの〈権利根拠〉はどうなるのだろう．それらはすべて，フッサールの哲学的洞察のなかにすでに含まれているというのだろうか．フッサールの分析は，それこそ色彩現象の本質をすでに〈射抜いて〉しまっていて，いかなる色彩現象の記述もその分析に背くことはできないというのだろうか．少し言いがかりめいているかもしれないが，本書のスタンスが科学に含まれた哲学的／形而上学的な予断を廃するということであるなら，あまりに安易にもう一つの哲学，現象学の有効さを強調するのは，本書の具体的な分析の普遍性をかえって損なうようなスタイルではなかろうか．本書の至る所で行われている現象学的見方の「宣伝」もまた，現象学シンパ以外の読者にはかえって逆効果になっているように思われる．

この評者の違和感を逆の視点から述べれば，色彩現象を歪曲させる「哲学的偏見」に対する著者の診断は，基本的には昔ながらの現象学の教科書通りのものであって，感覚やクオリアの存在論的な問題を正面から受け止めようとはしていない，ということである．著者は，色彩の科学の前提には，「実在と仮象，あるいは，物理的性質と感覚といった明確な二元論的な概念図式」(本書，p. 6）があり，また「近代物理学で描かれる世界のあり方のみが真の実在であり，色を伴って知覚的に現れる世界のあり方は実在ではない[錯覚だ]」（強調は原著者，本書，p. 12）という形而上学的テーゼがあ

る，と主張するが，この種の捌き方は，現在の存在論的議論の微妙な論点には粗すぎるのではないだろうか．例えば，グローバルな物理主義／自然主義の企ての下で，たとえ色彩が〈錯覚〉だとされても，その〈錯覚〉の実在性が否定されるわけではなく，ただその〈錯覚〉の整合的な物理主義的／自然主義的解明が次の課題となるだけである．色彩の〈法則的な錯覚性〉は色彩に関する自律的な個別科学を十分可能にするだろうし，それゆえ〈錯覚〉という存在論的な分類をしただけでその扱い方が不都合だ，ということにはならないだろう．この点では，著者自身も大ざっぱな整理だと断っているが，終章における「消去説」「物理主義」「ディスポジショナリズム」の評価は，いささかおざなりという感がぬぐえない．いずれの陣営の論者も，これからという議論の展開をお定まりの二元論非難で門前払いされたと思うであろう．

第I部から得られた刺激を述べよう．それは，著者が繰り返し立ち帰る，〈空間性を初めから備えない感覚をいくら寄せ集めても空間的な感覚は生じない〉という論点である．ジェームズを引きながら著者が言うように，これは，「心の非空間性というデカルト以来のドグマ・・・を打ち破り，「心の空間性」，あるいは，「意識の空間性」を認める可能性を開く」（本書，p. 64）ものであろう．確かに感覚には，時間性は認められてきたものの，感覚〈経験〉という側面からか空間性は拒まれ，その違いが物質と意識の区別根拠の一つとさえされてきた．しかし，もし物理主義／自然主義が感覚とクオリアを本気で物理的世界に回収しようとするなら，たとえ性質一元論を取ろうと，あるいはスーパーヴィーニエンスに依拠する性質二元論を取ろうと，感覚／クオリアの本源的空間性を何らかの形で積極的に認める方向の議論が必要になるのではなかろうか．意識や感覚／クオリアの空間性の主張は，むしろ物理主義／自然主義にとってこそ，知覚世界と物理世界という厄介な重ね描き的状況を〈整合的な一枚の絵〉に収めるための突破口になるのではないか．しかし，これはもちろん，著者ではなく評者らにとっての課題である．

最後に簡単に第II部，ゲーテ，ウィトゲンシュタイン，カンディンスキーらの色彩論を素材にした色彩の多次元性の議論に触れておきたい．ここでもおおよそ魅力的と言ってよい仕方で論述は進んでいくが，読み進めていくにつれてどうしても無粋な問いをしてみたくなる．いったい，この話は科学か，文学か，それとも哲学か，そのいずれを目指したものなんだろう．そのどれでもないし，そのどれかであることはどうでもよい，というのが著者の答えだろうか．まあ，それもいいのかもしれない．出来合いの「ひきだし」に収めなければ安心できないというのは，野暮というものだろう．しかし，そのどれでもない，あるいはどれでもあるということが，どれとしても中途半端だということを隠すことになっていては，著者としても不本意だろうと思われる．例えば，ゲーテは，色彩の最も基本的な対立を〈黄〉と〈青〉に見て，その一方の極を「プラス　黄　作用　光　明　強　暖　近　反発　酸との親和性」（本書；p. 155）と表現する．あるいはまた，カンディンスキーは，その〈黄〉に関して「黄色は典型的に地上の色である．・・・黄色は，狂気を色彩で表現するものといった印象を与えるが，ただし，憂鬱症や心気症のそれではなく，むしろ凶暴性や盲目的な錯乱症，躁

狂症を表現したもの」(本書, p. 218) だと述べる. もし著者の狙うものがそれぞれの人間によって〈生きられた色彩〉の記述であるなら, われわれが求めるのはゲーテやカンディンスキーのそうした記述に対する著者の醒めた「解説」ではなく, 自分によって個人的に〈生きられた色彩〉を表現する現象学者・村田純一の (純一色の?) はじけた言葉である. しかし, その言葉は本書ではまだ聞くことができない. 著者の才能に対する期待の裏返しのつもりで注文をつけているのだが, その言葉が熟するまでは, 評者には, 色彩の多次元性の話は個別科学としてはあまりに真偽から遠く, 文芸批評としてはいささか退屈で, 哲学としては議論に欠ける, という思いを追い払うことができない. 著者のやろうとしていることは, 本当に生態学的現象学という哲学 (もしくは個別科学?) なのだろうか? これまた評者の独断と偏見の産物かもしれないが, 環境との相互作用を売り物にした昨今はやりの「生態学的〜」の行き着く先は, かつて〈意味〉や〈身体〉に難問のすべてを押しつけたのと同様に〈環境〉をすべてのゴミ箱にした, 口当たりがいいだけの哲学とは違うのだろうか? どなたか評者の蒙をひらいて頂ければ幸いである.

(柴田正良)